特集　新しい学びのかたち

相互啓発と新学習空間 ラーニング・コモンズ

大学学習支援・教育開発センター

2012年10月、今出川校地の同志社中学校跡地にオープンした良心館。その2・3階に設けられた巨大な学習支援施設「ラーニング・コモンズ」が2013年4月より運用を開始。連日大勢の利用で活気を呈し、全国各地の大学から注目を集めています。

日本最大級の面積と設備

学生が自ら「能動的に学ぶ姿勢」を修得できるよう、ハード・ソフト両面で総合的な学習支援を行う空間がラーニング・コモンズです。これは90年代にアメリカ・イギリスなどで生まれた概念で、スタッフによる多様なサポートや、柔軟に活用できる情報通信環境などが、主に大学図書館の一画で提供されてきました。図書館が舞台となったのは、文献検索のオンライン化が進むに伴い、カード目録を撤去した跡のスペースを有効利用するという背景があったからでした。

日本にラーニング・コモンズの考え方が取り入れられたのは2004年ですが、本学では既に2003年、これに値するものとして、京田辺校地に同志社ローム記念館が開設されています。このたび今出川校地にオープンしたラーニング・コモンズは、良心館に「クリエイティブ・コモンズ」「リサーチ・コモンズ」という二つのフロアを備え、総面積は約2550平方メートル。ラーニング・コモンズとしては日本最大級の空間で、一度に最大約900人が利用できます。また、多くの大学の場合は、図書館内という比較的限られたスペースにラーニング・コモンズが設けられてきましたが、本学のラーニング・コモンズは図書館の付帯施設ではありません。実社会での学びを考えれば、図書館という静かな環境ではなく、大勢の話し声や動きが自然と耳や目に入る環境で刺激し合いながら学ぶことにこそ意味があります。実際に平日は、平均して1日にのべ約3500人が利用し、館内のあちらこちらで意欲的な学習活動が行われています。

●クリエイティブ・コモンズ

良心館2階を使ったエリアに、120型ワイドスクリーン2面を備えたプレゼンテーションコート、大画面で海外放送を見ながら留学生との交流や留学相談ができるグローバルビレッジ、グループ学習用のインフォダイナーやグループワークエリアがあります。また、貸出用ノートパソコン約80台が用意され、自動貸出返却ロッカーから借りることができます。

インフォダイナー

フロアのコンセプトは「学びの交流と相互啓発」。パーテーションのほとんどない開放的な空間なので、どのエリアにいても他のグループの活動が自然と視界に入ります。学生たちは学部や専攻の枠を超えて互いに刺激やヒントを与え合い、学習方法を学び合う。大学という広い場を最大限に生かす知の交流が、そこに生まれています。

フロアの随所には、多様な学習活動を引き出す数々の工夫がなされています。インフォダイナーには、壁に画像を映しながらホワイトボードに書き込みができるデジタル&アナログボードを設置。実際のデータを画面で見ながらアイデアを出し合うことにより、紙の上での議論よりもさらに活発な意見交換が行われています。またプレゼンテーションコートは企画に合わせてフレキシブルなセッティングが可能で、気軽なトークセッションからポスターセッション、イベントまでさまざまな催しに使えるほか、分割して使えばワークショップなども開催できます。グループワークエリアにも人数に合わせて多様なセッティングができる、正方形や勾玉型のテーブルを配置しています。また、日本文化の実習や発表などに使える畳スペースもあります。

●リサーチ・コモンズ

良心館3階にある回廊状の吹き抜けフロアです。コンセプトは「アカデミックスキルの育成空間」。学生はアカデミックサポートエリアに常駐するインストラクターから、機器の使用方法、さまざまな学びの方法、レポートの書き方、プレゼンテーション・企画提案などについて、実践上のサポートを受けられます。今秋以降は、実習プログラムを受講した大学院生によるラーニング・アシスタントも加わる予定です。

アカデミックサポートエリアを中心として、吹き抜けの縁に検索・自習コーナーが並び、それを取り巻くように多彩なエリアを配置。アカデミックスキルを実践的に学ぶ講習会などを開催するワーク

ショップルーム、最新機器を備え専属スタッフを常駐させた編集スタジオであるマルチメディアラウンジ、自在にスペースを区切れるグループスタディルーム、さらに、印刷会社が運営するプリントステーションでは、普通サイズから大判ポスターの印刷や製本までできます。

３階フロアもガラスの仕切りを多用した、見通しのよい構造です。他のコミュニティが学んでいる行為そのものが、別のコミュニティにとって刺激となり、意味のある情報となるはずです。ラーニング・コモンズはＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーク・サービス）のリアル版と言えますし、「勉強の回廊、見本展示会」（教育支援機構　学習支援・教育開発センター　井上真琴事務長）とも言えます。そしてＳＮＳがそうであるように、学生自らが能動的な学び方を修得して成長するにしたがって、ラーニング・コモンズに日々新たな刺激と交流が生まれ、この空間自体も成長していくのです。

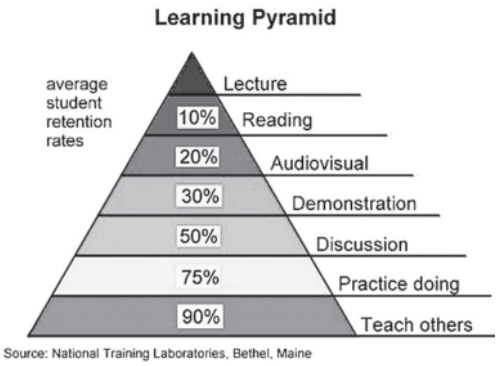
授業外学習の質的向上を進める「アクティブ・ラーニング」

現在、国内外の高等教育では、学生が実際に獲得した能力、つまりラーニング・アウトカム（学習成果）を重視した教育改革が潮流となっています。一定レベルの成果を確保するため、授業形式や教授法の研究も盛んに行われています。

授業形式と平均学習定着率との関係については、アメリカ国立訓練研究所による「ラーニング・ピラミッド」という図（別図）があります。それによると、講義型で覚えた知識は、２週間後には５％しか定着していません。50％以上定着しているのはディスカッションや実験などを取り入れた学び方です。最も定着率の良いのは、学生同士が教え合う形式でした。

例えば企業で人事異動が行われると、新たな部署に就いた人は経験者から新しい仕事を学びます。教えられた側は早く追いつこうとして自ら底上げに努める。教える側も、教えることによって理解がさらに進む。一人で学ぶよりは複数で学び合う方が全体の視野が広がり、知識や思考の偏りが調整される。現在高等教育で注目されているのが、そういう方法を取り入れた「ピア・ラーニング」あるいは「ピア・サポート」です。

「ピア・ラーニング」とは、文字どおり「ピア（peer＝仲間）」と共に学ぶこと。教員から学生へ一方的に知識を与えるのではなく、学生同士が知識や情報、疑問を持ち寄って共有し、教え合うことによって学びを深め合う。また、他のグループの学習を見て刺激を受ける。このような能動的な学び方をアクティブ・ラーニングと呼びます。アクティブ・ラーニングの中で学生たちは議論を戦わせ、意見がくいちがう葛藤を経た上で新たな発想やソフトを生み出していきます。あるいは、一つの対象について各グループがそれぞれ異なる側面から調べ、発表する。仲間同士でそれぞれの発表を補完し合うことによって一つの像が見えてくる。社会では日常的に活用されている「ジグソーメソッド」も、ラーニング・コモンズという空間を利用すれば、より効果的に行えます。



文部科学省の大学設置基準では、１単位を取得するには45時間の勉強が必要であることが規定されています。しかし、授業が行われるのは15時間ですから、つまり授業に要した時間の２倍を自学自習できていなければ、「単位」制は意味をなしません。ところが東京大学の大学経営・政策研究センターが実施した全国大学生調査の結果によると、大学生の学習時間は１日にわずか４・６時間。１週間に１～５時間しか勉強しない学生は全体の６割にのぼります。

この授業外学習を確保するため、アメリカではリーディング・アサイメントを中心として多くの課題が出されていました。しかし文献や資料を読むだけで授業に臨むよりは、授業外にグループ学習を取り入れた方がより効果的であることが理解されるにつれ、ピア・ラーニングによるアクティブ・ラーニングの意義が広く認識されてきたのです。アクティブ・ラーニングは、自ら問題を発見し解決する主体的な学びを導きます。ラーニング・コモンズはそのための空間です。

今後も新しい学びを創造し続ける拠点に

教育改革は一朝一夕には実現できません。同志社大学でも、この新しい学びが実を結ぶためには約10年が必要だと考えています。今回ラーニング・コモンズがその起点となり得ることが分かり、同施設で新しい学びのスタイルを模索していくとともに、今後も学内に同様のアクティブなスペースを設置していく予定です。図書館との新たな連携も考えられます。ラーニング・コモンズは学び方の発見に最適で、図書館はテーマの発見に最適な場所。今後は逆に、図書館にしかできないラーニング・コモンズを模索し、どのような新たな学び方を提供していけるかも問われてくるでしょう。

マルチメディアラウンジなどでは、アメリカで盛んになってきたデジタル・ストーリーテリングへの活用が始まっています。これはレポートなどを10分程度の映像作品として発表するもので、インターネットからの安易な引用がしにくく、映像には文字のみでは伝えきれない説得力があります。作成者の表現力も育まれます。その点でラーニング・コモンズは「モノの先行投資というより、思想の先行投資」（井上事務長）と言えます。

広い視野から現状分析と将来展望をもって行動できる人材の育成が同志社の教育目標です。ラーニング・コモンズがそのための新しい学び、すなわち「現代の教養」につながる場として育っていくよう、同志社大学では今後も整備を進めてまいります。

ポジティブ思考を呼び込む新しい学び方
「プレイフル・ラーニング」の実践

女子大学現代社会学部現代こども学科

同志社女子大学京田辺キャンパス聡恵館にガラス張りのT556演習室があります。ダクトレールライトが照らす中に浮かび上がる白い什器や情報・映像機器、笑顔で活動する学生たち。放送局のスタジオのようなライブ感あふれる空間から、新たな学びのかたちが育っています。

可能性を広げる「プレイフル」な学習環境

T556演習室の設計者は学習環境デザインと教育工学が専門の、女子大学現代社会学部現代こども学科・上田信行教授です。現代こども学科では小学校教諭一種・幼稚園教諭一種免許に加え、2012年4月入学生からは保育士の資格も取得が可能です。現代の教育が重視するのは能動的かつ創造的な学び。この流れに対応できる新しいタイプの小学校教員の育成をめざす中、上田教授が追求するのが「プレイフル・ラーニング」です。

プレイフルとは「本気だからこそ、物事に対してわくわくドキドキする心」のこと。わくわくしながら夢中になって学んでこそ、子どもは自分の可能性を見出し、自信がもてる。考え方次第で自分の周りの景色は変わる。プレイフルな考え方は人をポジティブにさせます。「新しい課題や挑戦を目の前にしたとき、〝Can I do it?〟と考える人と〝How can I do it?〟と考える人がいます。Canで考える人は変化を恐れ、『できない』と思うと挑戦する前から心にブレーキをかけてしまう。誰でもそのようなプレッシャーは感じるものですが、それは学ぶ機会を失うこと。一方、Howで考える人は、できるかどうかよりも『どうすればできるか』を考える。努力すれば能力は伸びることを知っています。だから、より幅広い選択肢の中から実現可能な方法を探れる。実現の予感にわくわくして、挑戦を楽しめるのです」（上田教授）

どのような場がプレイフルな学びを創造できるのか。上田教授は「自分とその場にいる人や道具を最大限に活用できる空間」に注目。構想から約1年をかけ、2005年にT556演習室が完成しました。

この演習室の大きな特徴は、学びを多様にサポートする充実した映像・音響・照明機器はもとより、グループワーク、プレゼンテーション、ワークショップ、アトリエなどさまざまな形の授業に対応できる空間と、部屋の奥に設けられた中2階的なロフトスペースです。

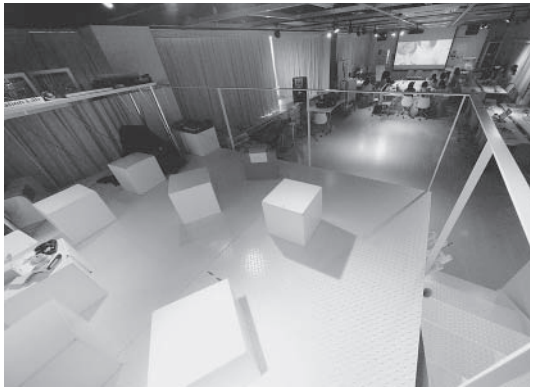
長方形の教室に置かれたテーブルは女子学生の力でも移動させやすい可動式で、授業や活動のスタイルによって簡単にレイアウトが変えられます。ノートパソコン、150インチプロジェクションシステムに音響設備も充実しており、講義デスクにはプロジェクター、マイク、パソコン、DVDなどの切り替えを一元管理できるパネルを設置。「キューブ」と呼ばれる真っ白な箱はイスやテーブル、収納ボックスなどに使われるほか、作品を載せてディスプレイしたり、積み上げてオブジェとして撮影してデザインに取り込んだりと、さまざまに発想を広げるツールとして活用されています。パソコンで制作した図柄を布に刺しゅうするUSB搭載ミシンや、名刺などをプリントするカッティングマシンもあり、学生の創造力を刺激する近未来的ラボという印象も受けます。学生が「この教室に来れば何かができそうな気がする」と言うように、まさにプレイフルな期待感に満ちあふれた空間です。

7月某日の上田ゼミでは、就活組の学生たちがムービー作品をプロジェクターに映し始めました。翌日に教員採用試験を控える仲間への応援ビデオでした。学生と教員からのメッセージを録画し、躍動的なJ-POPの音楽を入れてテンポよく編集した力作に受験組の学生たちは驚き、胸を熱くしていたようです。「誰かの誕生日であれば、ちょっとした誕生会を授業中に開くこともあります。一番の目的はHowを学ぶこと。どうすれば人を驚かせ、喜ばせることができるか。これもプレイフルな学びの一環です」（上田教授）

上田教授の唱えるプレイフル・ラーニングの原点は、アメリカの教育番組「セサミストリート」でした。「留学していた1970年代、ニューヨークでセサミストリートの制作現場を見学する機会があり、スタッフたちの熱気とあまりにも楽しそうな仕事ぶりを見て衝撃を受けました。いろんな分野の人が集まった、まるで壮大なワークショップ。スタジオ全体が、他者との化学反応によって身体からあふれ出るポジティブなエネルギーに満ちている。あの時に感じた興奮は今も忘れられません」人が夢中になって取り組み、他者や出来事と能動的に関わっていくプロセス。上田教授はそれが「学び」だと考えます。

「メタ認知」によって深める学び

演習室のロフトスペースは「メタフロア」と呼ばれています。自分の行動や考えを異なる角度から見て客観的に認識することを、認知心理学で「メタ認知」と



メタフロア

呼びます。例えば世阿弥の「花鏡」にある「離見の見（りけんのけん）」は、自分の演技は客席の視点からも考えて完成させよという教えであり、メタ認知そのもの。演習室を一望できるメタフロアは、まさに学生が自分たちの学びを俯瞰して見つめ直すための場所です。頭の中だけをメタ認知モードに切り替えるのが難しいなら、実際に俯瞰できる場所に上がって物理的な視点を変えることにより、精神的にも俯瞰的な考察ができるようにするための装置なのです。

リアルタイム・ドキュメンテーション

上田ゼミでは学生が授業をビデオカメラで記録し、再構成して活用しています。このリアルタイム・ドキュメンテーション（RTV）は振り返りになるとともに、その場では言語化できなかったことを映像化することによって新たな気づきを引き出すメディアになり得ます。あるいはイーゼルに架けた大きなメモパッドに、学生がリアルタイムで授業内容を解釈しながらまとめていく。それを他の学生が読み、また内容を振り返りながら次へ進む。こうして授業内容が何重にも再構成されながら深められ、学生は自然にメタ認知的アプローチを身につけていきます。

同ゼミでは歌ったりダンスをしたり、メタフロアをステージにしてパフォーマンスをしたり、モノづくりをしたりと、プレイフルなワークショップ型の授業が頻繁に行われます。プレゼンテーションには映像や音楽が、内容に応じて照明も効果的に使われ、学生は表現力を涵養していきます。上田教授の考える教育とは、このように「学生に表現させ、自らの言葉で語り、アウトプットをさせること」。学生自らが体験したことを自分の中で意味あるものに構築し、言語化あるいは可視化という形でアウトプットする。それはメタ認知にほかならず、またアウトプットしたものについて仲間と意見を出し合うことにより、新たな気づきや発見が生まれます。一人では達成できそうにないことも、他者との協働によって達成可能になることがある。このように学生が仲間と創造的に対話しつつ、共愉的に生き生きと学ぶあり方＝conviviality（自立共生）こそが学びの基本であると上田教授は考え、そのための表現活動を活性化させる目的で設計したのがT556演習室という学習環境でした。空間と活動がリンクする中で学生自身が学びをデザインし、仲間と共に学びを広げ、深める。

アトリエ的学びの風景

まさにここは「ラーニング・コモンズ」でもあるのです。

社会をわくわくさせる プレイフルな人材を育成する

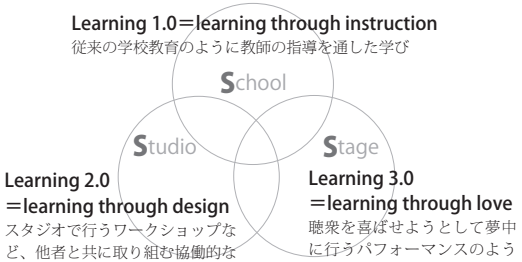
T556演習室の感想を上田ゼミの4年生に聞きました。「この教室を初めて見た時は衝撃だった」「学びのための環境が揃っている」「みんな、この部屋が大好きです」。企業に就職する学生も「ここで身につけた表現力や省察力、構築力は面接で非常に役立った。自分たちが実際に経験してきたことなので自信をもって話せた」と言います。

同ゼミからはガールズ・メディア・バンドという名のグループも誕生しました。学内外のワークショップなどでパフォーマンスをしてコミュニケーションの場を創造する、いわばコミュニケーション・バンドで、多い人では160ものステージに参加しました。これらのプレイフルな学びを生かし、JR大阪駅北口のグランフロント大阪に今春オープンした知的創造拠点「ナレッジキャピタル」に、上田ゼミから2人がコミュニケーターとして就職。多彩な企業が集まってイノベーションを起こす場で企業同士を仲介する専門スタッフとして活躍しています。

上田ゼミ４年生

上田教授は自著『プレイフル・シンキング―仕事を楽しくする思考法』（宣伝会議）で、こう述べています。「物事に積極的にかかわろうとする知的好奇心と、それを俯瞰してながめるもうひとりの冷静な自分をもつこと。その両輪をうまくまわしながら革新を生み出すことが、プロフェッショナルである」現代社会が必要としているのは、専門知識・技術をもつだけでなく、状況と対話しながら自分を進化させることができる人材です。プレイフル・ラーニングを実践する学生たちは「自分の学びに価値を見出している。やらされているのではなく、自ら進んでやっている」と上田教授は言います。それが学びの本質であり、教育現場はもちろん実社会においても「プレイフル」という概念は今後もキーワードになっていくものと思われます。T556演習室も、このような新たな学びの実験室としていっそう活用されることが期待されています。

上田教授の Learning3.0 モデルと「３つの S」



新時代の学校校舎建築と「教科センター方式」での学校運営

中学校・高等学校副校長　竹山（たけやま）　幸男（ゆきお）

1. 豊かな緑に囲まれた美しい赤レンガ校舎のキャンパス

2010年秋、同志社中学校は創設の地である京都御苑北の今出川キャンパスから国立京都国際会館に隣接した自然豊かな新キャンパスに移転しました。京都駅から地下鉄で20分。駅前すぐに広がる新キャンパスの敷地は、甲子園球場の2・5倍で約10万㎡。訪れた保護者や国内外の教育関係者から「誰もが憧れる理想的な校舎」と賛辞が寄せられ、見学に訪れた小学生は「ぜひ合格してこのキャンパスで学びたい」と決意を固めてくれます。京都市内はもとより、大阪や神戸など関西広域、近年では岐阜、名古屋から新幹線で通学してくる生徒もいるほどです。

外観を赤レンガ、内装を落ち着いた木目で彩られた校舎は、新キャンパスのシンボルであるグレイスチャペルを中心に、高等学校とともに外国の街並みを彷彿とさせる格調高い落ち着いたキャンパスとなっています。京都市の歴史的文化財に関する風致地区に位置する本校は、それに相応しく和風の瓦屋根とし、各校舎は芝生のあるヤードを囲むように建てられています。明治の学制発布以来、日本各地で見られる片側廊下に教室というハーモニカ型の教室配置や高層階の校舎など、

効率を最優先させたものとは大きく異なっています。

新キャンパスは、学校建築計画の第一人者である長澤悟先生（東洋大学教授）の監修、香山壽夫先生（東京大学名誉教授）によるもので、ハーバード大学に代表されるアメリカ北東部、ニューイングランド地方の大学をイメージして計画されました。「現在の中学生が活躍する今後の世界や社会はどのようになるか」「未来の世界市民となる生徒たちの学習の場であり、一人ひとりの成長を育むキャンパスとは何か」など、監修者や設計者とともに、さまざまな工夫を凝らしながらこのキャンパスを創りあげました。

建築が与える人間への影響は、目に見えるもの、見えないものを含めて多大なものとされており、子どもたちにとって毎日の大半を過ごす「学校」という場の環境は想像以上に大きな働きかけをなすものです。特に、一人ひとりの人格形成の基礎をつくる、第2の誕生と言われる「思春期の時期」を過ごす中学校・高校の学校環境はとりわけ重要なものだという観点から、10年以上の調査と検討をもとに新たな校舎建築を練り上げてきました。

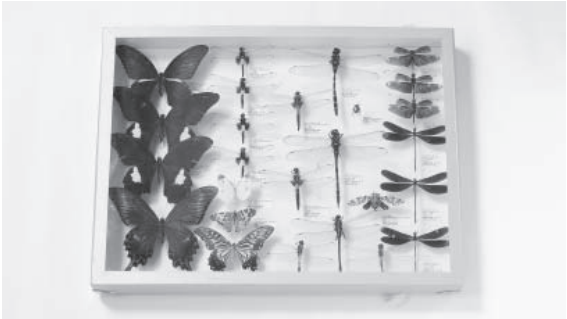
2. 新たな学びを創出する「教科センター方式」での学校運営 ～大学・社会人につながる学び～

新キャンパスにおいては、従来の一般的な中学校の学習スタイルとは一線を画す教育環境を実現しています。私たちが目指したのは、創立者新島襄の「自由・自治・自立」の精神に基づく一人ひとりを大切にした「参加型の学び」と「教科の専門的な学び」をより一層強化した最新の学びの場の創出です。これまでも多くの特別教室を有しており、特に理科などは、物理・化学・生物・地学の分野別に特別教室を設けるなど、設備も含め施設が充実していました。それに加え、この度導入した「教科センター方式」の校舎教室配置では、国語、数学、社会、英語などの教科においても、複数の教科専門教室を設け、全授業を教科専門教室で行うようにしたことが大きな特徴です。そのため、生徒たちは、授業ごとに教科専門教室に移動して授業を受けており、このことが生徒の主体性をより高めています。また各教科の専門教室に隣接したメディアスペースでは、各教科の関連書

籍や教具などを置いているほか、生徒のレポート、研究発表などを行ったりと、展示・発表スペースにもなっています。このスペースは、教科教員室とも隣接しており、教科の補習、先生への質問や相談、生徒の自習スペースとしても活用されています。これらの教科専門教室すべてに、電子黒板やプロジェクター、それに付随する機器類を完備し、２０１３年度からはiPadの授業活用も含め、教員はもちろん生徒たちも個人ならびにグループ発表においてそれらを積極的に活用することで、より興味深くわかりやすい授業を展開しています。中学校校舎棟の「立志館」の中心には、３万８０００冊所蔵の中学生専用の図書・メディアセンターが配置され、読書教育はじめ教科教育や研究発表調査のための資料調べに活用されています。

本校では、学習指導要領をはるかに超えた質と量を学ぶことも特徴です。大学までの学びにつながる教科学習との初めての出会いとなる前期中等教育。高等学校や大学で学ぶことも一部取り入れながら、学問のおもしろさに触れ、将来につながる興味や関心を引き出し、一人ひとりの知的好奇心、探究心を育むことを目指します。そのため、これまでも各教科においてオリジナルのテキストやプリントを用いた授業が展開されてきましたが、新しい校舎建築によってますます授業内容を充実させることのできる学習環境が実現しました。教員が教室に出向くのでなく、生徒が教科専門教室に移動することにより、その1時間の授業で必要な実物や写真、映像を含めた各種データ、提示資料を効果的に準備することができます。また、授業方法についても、机配置の多様な工夫により、グループ学習・発表を含めた授業展開も可能です。生徒同士による発表や討論、掲示物による学びは、学習に対するモチベーションを限りなく高めることにつながります。学年を超えて、仲間とともに学びを啓発し合う環境こそ、中学校時代に必要不可欠なものと考えています。折しも同志社中学校跡地の同志社大学良心館に、日本最大級のラーニングコモンズができましたが、「教科センター方式」による学びの環境はまさにその中学校版と言えます。

本校で40年以上にわたって取り組まれている自由研究・自主製作。生徒自らがテーマを見つけ長期休暇を活用して取り組むもので、日本の方言などの言語研究、昆虫や植物などの生態、地域の産業、数学の定理についてなど研究のテーマは全教科にわたり幅広く奥深いです。各教科のメディアスペースでは、自由研究の優秀作品の展示も行われ、学校として毎年1冊の本にまとめて発行（今年度で48号を数える）しています。さらに、中学生段階から大学の研究室（同大・京大など）や企業への訪問をはじめ、卒業生・同窓生の協力による商品開発（今年度は「八重の桜」にちなんだ会津木綿のがまぐち商品―京都高島屋で販売）、アショカ財団の協力による叡山電車八幡前駅プロジェクト（駅の活性化をテーマに）も行いました。



「教科センター方式」の校舎・教室での授業づくりは、生徒と教員双方にとって、無限の可能性を秘めています。近年、大学の教育改革で進められているアクティブ・ラーニングや課題解決型・プロジェクト型授業などの取り組みにつながる新たな学びが、今後さらに深められていくことを期待しているところです。

図書・情報センターで育てる力

女子中学校・高等学校　司書教諭　加藤美穂子（かとうみほこ）

私が同志社女子中学校・高等学校の司書教諭として働き始めて、一年が過ぎました。この一年は、あっという間に過ぎていきました。しかし、見えてきたものもたくさんあります。図書・情報センターでおこなう授業の中で、これからの社会において必要不可欠な情報を活用する能力を育てていきたいと思っています。

全学年を通じて体系的に教える情報活用能力

同志社女子中学校・高等学校における学校図書館を利用する調べ学習は、長い歴史があります。その中でも、「総合的な学習の時間」が導入された２０００年代初頭からは、学校図書館がカリキュラムに組み込まれ、長期的に活用する授業が増えたことで、司書教諭による情報活用の指導が体系的におこなわれるようになりました。「総合的な学習の時間」では、単に与えられた課題に対して調べた結果の報告に終わらず、生徒が自ら課題を見つけて情報を集め、その解決策を探る探究的な学習がおこなわれます。このような学習を進めるために、図書・情報センターでは、司書教諭による情報活用の指導がより重視されることになりました。司書教諭と教科担当教員の協働が、全学年を通じての情報活用能力の体系的な指導に大きな役割を果たしています。２０１３年度は、中学１年と高校１年を除く４学年で「総合的な学習の時間」があり、それぞれの学年で授業目標や課題が設定され、それに応じた様々な形で図書・情報センターが活用されています。もちろん「総合的な学習の時間」以外でも、様々な教科において、図書・情報センターを活用する調べ学習がおこなわれています。全学年で図書・情報センターを活用する授業が必ず年に一度あり、その授業において授業目標や内容に応じた情報活用の指導がおこなわれ、体系的な情報活用能力を育てることを目標に、様々な教科の教員との協働を進めています。

多様なメディアを使い分ける

調べ学習において、ますますインターネットの比重は高まっています。しかし単に便利だというだけでなく、そのメディアの特性を考えた上で、多様なメディアを適切に使い分けられるようになってほしいと考えて、図書・情報センターの授業の中で機会を作り、その力を育てる指導と支援をおこなっています。

図書・情報センターを活用する授業では、「インターネットを使わず、印刷メディアで調べること」という条件の課題がしばしば出されます。たとえば、中学２年生の「総合的な学習の時間」では、人権問題に取り組んだ人物を調べますが、まず人名事典や百科事典を用いて、その人物の基礎的な知識を得ることから始めました。実際に参考図書を活用する課題での利用指導は、生徒にその必要性を感じさせるのに重要な意味があります。その後、社会の課題で歴史上の女性を調べる課題が与えられた際に、生徒たちがみずから人名事典や百科事典を利用する姿が見られました。

このような課題を課す理由は、多様なメディアの中から、必要に応じて最適なものを選び取る力を身に付けてほしいからです。調べるにはインターネットしかないと考えている生徒が多くいますが、図書や雑誌、新聞など従来からの印刷メディアも、授業を通じて利用する練習をすれば、情報を得るための選択肢として加わります。インターネットは確かに便利ですが、その内容や質の信頼性には疑問があります。インターネットを利用する課題の場合は、情報活用のガイダンスの際に、信頼性の高い情報を選択できるように、情報の発信者を確かめることや、他のメディアと合わせて利用することが大切であると伝えます。デジタル・ネイティブの生徒たちは、パソコンの検索には慣れ親しんでいますが、検索語の選び方や発信元の確認方法などに習熟しているとはいえないので、情報を選択的に入手するための方法として、中学１年からガイダンスで教えます。

情報を主体的に選択して活用する人に

学校図書館の目的のひとつとして、学校図書館法第２条で「学校の教育課程の展開に寄与する」と定められています。学校図書館は、多様なメディア・豊富な資料を備えて、生徒が自ら課題を発見し、情報を収集・選択し、解決策を探る力を育てる役割を担っています。

高度情報化社会・知識基盤社会と呼ばれる現代社会においては、様々な情報が溢れかえり、情報を入手するのは一見簡単に思えます。しかし、洪水のように溢れるたくさんの情報の中から、自分の必要とする情報、価値のある情報を選びとるのは困難です。情報の量は多くとも、質が必ずしも保証されない社会において、与えられた情報をそのまま鵜呑みにするようでは、社会生活の質にも影響を及ぼします。これまでの社会よりも情報がもっと価値を持つ現代社会を担うことになる生徒たちには、玉石混交の情報の中から、その価値を判断し、有用な情報を主体的に選択して活用する能力を養ってほしいと考えています。

これからの社会はますますグローバル化が進み、知識に国境はなくなり、その量は爆発的に増加していきます。増加し続ける情報に対して、流されず、常に問い続ける姿勢が必要となります。図書・情報センターを活用する探究的な学習を通じて、これからの社会に必要不可欠である情報活用能力を育成するのが、司書教諭である私の使命です。生徒が、学校で学んだ知識を社会と結び付け、「地の塩」「世の光」として自分自身の力を社会で発揮できる女性となれるように、図書・情報センターでの取り組みを進めていきたいと思います。